
【オッサン、悩み　そして、デレる】

ログ核人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【オッサン、悩み そして、デレる】

【Nコード】

N2176G

【作者名】

ログ核人

【あらすじ】

Farce of the Creatorsの番外篇的な小話

【オッサン、悩み　そして、デレる】　Farce of
the Creators　の番外篇的な小話

とある安宿の二階にある一室で、山と積まれた書物を、安楽椅子に腰掛けて読みふける一人の姿があった。

ただ読書をしているだけなのに、その絵図らがやたらと知的で力ツコよく見える。白いブラウスに濃紫のスカートという清楚な印象を与える装いの、艶やかな長い黒髪を持ち精悍な顔立ちの女性であった。

静かに書を読みふける。それは彼女のささやかな至福であったが、しかしそんな至福の時は　突然に終わりをむかえる。

木製の扉を破壊するつもりなのではないか、と思えるくらい乱暴なノックの音によって。

彼女は渋々ながら呼び出しに応じ、扉を開き、

「……とりあえず、その、なんだ　理由はわからないが、すまん
目の前に現れた“それ”を見て、思わず詫びた。

「なに謝ってんだよ、お前え」

怪訝そうに言うのは、一見して近寄りがたい黒々とした雰囲気
身にまとう、右眼に漆黒の眼帯をした厳めしい面構えの中年男性で
あった。ハイネックの黒いセーターを着て、濃紺のジーンズをはき、
腰を締めているベルトの左右から鞘に納まった剣を吊っている。

「いや、なんだ、その、私はゼロの気に触るようなことをしてしま
ったのではないかと、知らぬ間に殺られるようなことをしてかして
しまっていたのではないかと　無意識に犯す罪ほど恐ろしいと言
うしな……」

視線を明後日の方向に逃がしながら言う彼女に、

「ああ？　なんだってんだよ」

ゼロと呼ばれた眼帯のオッサンは、「わけがわからねえ」と顔をしかめる。

そんなオッサンの疑問に、

「それはですねえ」

と答えるのは、長い黒髪の女性の背後からふわりと飛翔してご登場した、エメラルドグリーンの羽を持つ、手をいっぱいに広げたくらいの身長しかない小さなヒトだった。

「顔が怖すぎるですよお」

言いつつ、

「まさしく顔面狂気状態なのですよお」

小さなヒトは小さなその手でゼロの眉間に深々と刻まれたシワをペチリと叩く。

「……………」

眼帯のオッサンは、眼前の小さなヒトを射殺さんばかりの眼光で見やる。気に喰わないから殺つてやる、とか思っているわけではない。

「……………さすがの俺も泣くぞ」

あまりにもバツサリな物言いに、ご傷心なのだ。

「こら、アキ。言いすぎだぞ」

長い黒髪の女性は小さなヒトをたしなめつつ、

「すまん、ゼロ。昼寝していたところを叩き起こされて、不機嫌なんだ」

アキと呼ばれた小さなヒトが毒舌な理由を述べる。

「謝られると、よけいにいたたまれねえんだが……………」

怒っているんだか、ションボリしているんだか、まったく見分けのつかないオッサンの顔面事情はさておいて、

「……………それで、私になにか用事があるんじゃないのか？」

長い黒髪の女性は、強引に話題を変える。

「ん、ああ、お前えに訊きてえことがあってな」

そう、このオッサンの顔面が狂気的になっていたのは、べつに“

殺”な意味合いからではないのだ。ただ自己解決できない問題に苦悩していただけなのである。

「そういえば、今日は“そんな日”だったな。まあ訊くべき相手を間違えているようにも思えるが……。そうだな、私が思うに」
「オッサンの話を聞いて、長い黒髪の女性は自分なりのを“答え”をアドバイスした。」

コーヒーでも飲もう　　と思い、長い黒髪の女性は読書で疲れた目元を揉み解しつつ、安宿の一階にある食堂へと下りた。

「ん？ どうしたんだ、キキ」

そこには、

「あ、リムちゃん……ゼロが………ゼロが、ね」

と呆然とした表情で言う、着古した半袖の白いシャツに膝丈のジーンズというラフな装いの、肩口でカットされた外ハネな赤茶色の髪を持つ、一見してまだ若い雰囲気的女性が立ち尽くしていた。常ならどこかイタズラ好きっぽい躍動的な印象を与えるヒップでちょこちよこ動く髪の毛と同色の二又なシッポも、どこか元気がない。

「んん？ ゼロがどうしたんだ」

リムちゃんと呼ばれた長い黒髪の女性は、キキが呆然と眺める先に視線を移す。

そこには、カウンター席の向こう側で、なにやら調理作業中な眼帯のオッサンの姿があった。

「んー、確かに珍しいとは思うがな、ゼロだつてたまには料理くらいするだろう？　そこまで呆然とすることか？」

「だ、だって、突然だよつ、突然、今日はお店休みにするつて言うて、理由聞いても教えてくれないし、いきなり料理始めるし……」
「当惑気味なキキの言葉を聞いたリムちゃん　　リムティッシュはしかし、」

「不器用だなあ……」

と誰にも聞こえない呟きを漏らしつつ、密やかに微笑み、

「なあ、ゼロ。コーヒーを一杯、ついでに淹れてくれないか」
カウンター席に腰を下ろし、激しく仏頂面で調理をするオッサンに注文してみる。

「……………」
眼帯のオッサンは不満そうにひと睨みをやるが、手元はキビキビ動き、手早く一杯のコーヒーを淹れ終える。

リムティッシュュがコーヒーの香りと味わいを堪能して、その量を半分ほどに減らしたころ。

「よし。おいキキ、出かけるぞ」

眼帯のオッサンは調理を終えた品々をバスケットに詰め込んで、いまだ呆然としているネコマタハーフな娘さんの手を取り、外へ向かおうとする。

「…………え、ちょ、なにさいキナリっ。で、出かけるって、どこによっ」

手を引かれつつ疑問を口にするキキに対して、

「エルフ村の湖畔までピクニックだ」

料理などを詰め込んだバスケット片手に、眼帯のオッサンはなんと顔面に不釣り合いなセリフを言う。

「え、お、お店はどうするのよっ」

「だから今日は休みだ」

そんなこんなでピクニックにお出かけするお二人さんを、

「楽しんでくるといい」

リムティッシュュは背中越しに送り出す。その表情は、なにやらこっ恥ずかしいモノを見てしまったがごとく、ふにやりと緩んでいた。

深呼吸すると身も心も清らかになりそうな、静麗たる湖が見わたせるほとりに、厳肅たる風格と親しみやすさを兼ねた老樹があった。その木陰に

「なんか久々な気がする。ゼロの作ったサンドイッチ食べるの」

老樹の根に腰掛けて、硬い黒糖パンの“ベーコン・レタス・タマゴのサンド”をほおばるキキの姿があった。

「まあ、な。俺も久々に作った気がする」

湖を見わたすように腕を組んで仁王立ち、キキに背を向けるかたちで、ゼロは言う。

「ところでっ」

とキキは口の中のモノを飲み込んでから、

「今日は急にどったのさっ？ そんなに私と二人っきりになりたくなっちゃった？」

どこかおどけたふうに問う。

「悪いいか、そう思っちゃ」

いまだ背を向けたまま答えるゼロに、

「い、いや、べつに悪くないけど……むしろ嬉しいけど……」

いつもつつけんどんな彼からは想像しえない予想外な返しだったので、意図せずしてキキの顔は赤くなる。

「まあ、その……なんだ、こんな事するようなガラじゃあねえって
いう自覚は、あるんだがな」

オッサンは背を向けたまま、照れくさそうに頬をかき、

「たまには、ていうか今日くらいは、ガラにもねえことやってみようかと……。まあ、自分じゃよくわかんねえからリムティッシュにアドバイスもらったがな」

そう言うつと、ゼロはキキに向き直り、

「なんつうかな、お前えには、その、感謝してんだ……その、色々
と、な……。だから、その」

いっしょに居てくれて、ありがとう。

これからも、よろしく頼む。

【オッサン、悩み　そして、デレる】　了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176g/>

【オッサン、悩み　そして、デレる】

2010年10月8日15時22分発行